

18世紀末ノイホラント教区の世界 —農民日誌にみられる農民の世界像と日常行為—

増 井 三 夫*

(平成4年4月30日受理)

要 旨

本研究は、ベルリンから北々西約37kmに位置するノイホラント教区(改革派)における農民の日誌(1772—1810年)から、特に18世紀末の当教区における農民の世界像と日常行為を再構成し、教化・統合の単位として描かれてきた従来の教区像を再検討した事例研究である。同時にその再構成に際して書字行為の独自の役割も検証された。当教区は御料地で1766年に世襲小作料の永代化を実現し所有権及び人格権上の自由を獲得し、更に高い水準の識字力を有していた。分析の結果、自然現象、とりわけ彗星や異常気象を不可知な神の賜物と捉える伝統的な自然観に拘束されず(しかし時としてこれに回帰しつつ)、死に対する本能的恐怖の感情をキリスト教への信仰によって自ら抑制すると同時に行為と情報の媒体によって教区外の世界を拡大していく新たな農民像が18世紀末のノイホラント教区に現れつつあった。日誌の書字行為はまさしくこの旧来の自然・死生・社会関係のイメージや観念を書字を媒体にして表現し定式化すると同時に、その定式化された世界像を変革し実践的飛躍を可能にする契機となるものであったのである。

KEY WORDS

Parochie 教区
Sprachhandlung 言語行為
Tägliche Handlung 日常行為

Bauerntagebuch 農民日誌
Weltbild 世界像
Integrierungspolitik 統合化政策

I. 問題の所在

[1] 18世紀の村落共同体が独自の文化再生産構造を有し¹⁾、更にこの構造の上に教区—学区の規律化が機能するときその教化・統合化作用は強化される²⁾。教区—学区のこの「社会的規律化」「イデオロギー的教化・統合」が19世紀の「権威的社会」及び「国家イデオロギー」の「母体」「源泉」の一つとなった³⁾、という見解も周知の事柄に属す。その一方で特に W. ノイゲバウアーの精力的な研究は上記の教区—学区の捉え方を否定し、18世紀教区—学区における独自の——絶対王制の公権力が及ばない——教育現実があったことを指摘している⁴⁾。J. コッカはこの新しい絶対主義研究に対して事例研究を積み上げて検証する必要性があると述べているが⁵⁾、残念ながらこの事例研究の現状は当の教区—学区における独自の文化再生産や社会化過

* 教育基礎講座

程に言及が及ばず、公権力の介入が制限されていたという事実の確認の水準にとどまっており、ノイゲバウアーの見解は我国でも十分な支持を得ているとはいいがたい。

しかしながらノイゲバウアーの指摘は、法制史料に依拠する従来の研究方法に代わって18世紀の教区—学区の現実を個別的に明らかにする必要性と可能性を示したこと、同時に「18世紀の教区民は常に教化—統合の対象の地位に甘んじていたのだろうか」という疑問を考察する新たな研究領域の開拓の必要性を我々に喚起している、という二点において依然として価値を失っていない。

[2] 本研究は教区—学区の(非)教化—統合の現実を農民の世界像と日常行為を分析することによって明らかにすることを意図した事例研究である。この研究を着手するに際して最大の難点はこの世界像と日常行為を何によって検証するのかという点である。教化—統合は被教化—被統合者個人の世界像と日常行為に対する他律的統制であり、それは支配的規範と権威的命令に対して「自動化された automatized 行動」かつ「自動的 automatic 行動」(E. L. デシ)として顕在化する。従って教区—学区における個人の世界像と日常行為を分析する方法を確定することが不可欠である。本研究はこの方法の妥当性を検証する課題も担わざるをえないが、そのためにも以下において本研究において採られる方法を先行研究に依拠して予め明確にしておきたい。

教区民の世界像と日常行為を分析する領域として、最近では読書行為と日常行為の関連性を考察する研究がまずあげられる。読書行為は識字力を前提とするが、周知のように、この識字力は結婚契約書の署名能力によって推計されている。しかし R. シェンダ⁶⁾、原聖⁷⁾が指摘するように、この署名能力自体は識字力の実体を示すものではない。これは正鵠を射た批判である。これにかわるものとして、P. ラスレットの「読み書きができ、かつ日常の生活のなかでそうする習慣があること」⁸⁾が現在のところ最も妥当な用語規定であるように考えられる。本研究では、この用語規定にもとづいて、特に日常的な書く行為(＝言語行為)から世界像・日常行為を解釈するために、識字力を読み書き能力(＝言語能力)を操作する日常的な言語行為と言い換えて使用する。

識字力をこのように捉えて行論を前に戻すと、それでは読書行為→言語行為→日常行為はどのような関係になるのか。この点についてはフランスにおける民衆本の読書行為に関する研究が直ちに想起されるであろうが⁹⁾、しかしながらこの研究では書物の内容——例えば、反領主的・反伝統的規範内容——がこれと同じ表象と更に支配的規範に対する否定的感情—態度を読者に等しく喚起すると、「暗黙の内に前提」とされている(R. シャルチュエ)¹⁰⁾。C. ギンスブルグによればこのような分析は「まっとうなやり方とはいえない」¹¹⁾のである。

この両者の主張は上記の分析で読書行為→日常行為の間に読書人の言語能力と言語行為の独自の作用が過看されていることを鋭く指摘したものである。この日常的な読むこと書くことの言語行為を分析した研究成果は非常に限られているが、我々はギンスブルグの研究をまずあげなければならない。

ギンスブルグは異端教会裁判所における一農民メノッキオの発言記録および審問官にあてた書簡を直接の史料として使用し、読書によって得られたシンボルがメノッキオの長年にわたる「ぼんやりとよく整理されていないビジョン」「世界観」を「定式化し表現するための言語的および概念的な道具」となった、あるいは「学校を通じて完成される書字の文化」が「口頭伝承の文化のこの深層にあるものを溢れださせた」¹²⁾と分析している。この点を考慮にいて、更に、

メノッキオが「定式化し表現」しようとした「ビジョン」「世界観」をもみてみると、その基本的認識が聖一俗権威・神一人間・生一死、宇宙の成立、に向けられていたことに気づく¹³⁾。この他に喜安朗は一石工の回想記(1895年出版)を考察し、この回想記で石工がメノッキオと同様に自分が経験した「驚きや苦勞」を「記憶の底から一つ一つ掘りおこし」「繰り返し細かく書き込んでいる」ことを強調し、その石工の言語行為が個として自分を「改めて自覚」する過程をともなっていたことを解説している¹⁴⁾。

[3] 以上の先行研究の検討より、我々は、言語行為と世界像・日常行為との関係を、最近の認知科学と社会言語学の成果¹⁵⁾も援用して、次の様に再構成することができる。すなわち、言語行為は個人の世界像と行為を構成する口頭伝承の経験を定式化し表現し、そのことによって自己を自己自身・他者・環境と自覚的に関係づけ、更にこの過程で日常行為の新たな実践場面を拓ける、と。

もちろん、この言語行為と世界像・日常行為は史料より解釈されなければならない。しかし我々が利用できる史料は、次の二点の条件をみたしていることが必要であり、そのために非常に限られている。その条件とは、第一に実際に話された或いは書かれた言語事例であること、第二にその事例が話し手或いは書き手の言語行為と日常行為を記録したものであること、である。ギンスブルグでは農民の教会裁判所審問記録と書簡、喜安朗では石工の回想記がそれぞれ史料として使用されている。本研究では農民日誌が使用される。

本稿は二代にわたる農家の日誌とさらに他の農民日誌を補助史料として利用しながら、特に18世紀末におけるプロイセン教区における農民の言語行為から世界像と日常行為を解説し、教化・統合の単位ではない、むしろそれが解体しつつある教区の世界を描きだしてみたいと思う¹⁶⁾。

II. ノイホラント教区における社会的関係

[1] ノイホラント村はベルリンの北々西約37kmのところ position し、1817年のポツダム県勢要覧によると植民村でフリーデントール管区11ヶ村中2番目の人口(500人)を有し、改革派教区教会(パトロンは国王)の所在地と記されている¹⁷⁾。すでに紹介したように¹⁸⁾、当村は典型的な世襲小作(Erzgüter)村で、1810年の当教区査察報告によると世襲小作は63世帯中47世帯を占めた(他は聖職関係者4名、商人1名、退役兵1名、書記1名、日雇2名等)¹⁹⁾。村落は散村形態をなし、相互の家間は「かなりの距離」があった²⁰⁾。当村の主要産業は酪農で、その家畜・製品・穀物・牧草は近隣及び遠隔地市場で取引されている。後にみる日誌ではこれらの取引に関することが多数記述されている。

次に教区をみておこう²¹⁾。上述したようにノイホラント村は独立した改革派教区である。この教区教会には更にクロイツブルッフ、リーベンベルク、クレーフィシェ・ホイザー、ツェンデニックの4支教区が属している(以下ノイホラント教区と表記する場合これら4支教区を含めない)。これら4支教区は周辺がルター派教区のために5-15km離れている。この内リーベンベルク支教区、クレーフィシェ・ホイザー支教区のパトロンは私領主である²²⁾。

[2] 当村の基本的な社会関係を次に概観しておこう。まず世襲地代給付農民間の関係をみると、彼らの契約地代は年額モルゲン当り10グロシエンと低額で、経済的に自立した酪農経営

が営まれ、また村落形態も東エルベ地帯にみられた集村ではなく地理的な距離をおいた散村であることから、ここには伝統的な共同体規範に拘束された社会的関係はみられない。その他に、後段でふれるが、名望家層間の婚姻はみられた。一方国王との関係については少し詳しく述べておく必要がある。

当村は植民当時（1663年）改革派私領主の支教区であったが、カトリック、ルター両派も存在していたため両派の改革派への改宗が強制された。カトリック派の改宗は1704年にはほぼ完了したが、ルター派の抵抗は頑強であった。同年にノイホラント村は御料地となり、翌年にはデュレン耕地が開拓されここに入植が促進される。1708年にこの入植者と国王との間に世襲小作契約が取り交わされ、この中でルター派の子どもに対しても改革派で教育することが定められていた。そのうえ村長令でルター派に対し改宗を強制しない代りに改革派教会で礼拝する義務が課せられた。この措置の後、非改宗者に対する行政的圧力が強化された。例えば非改宗者のなかで最も強固な非妥協者であったペーレント兄弟はクールマルク政庁から上記の契約事項の履行を強制されたが、兄弟はこれを拒否し、その結果、両者の氏名が住民台帳から削除されたのである。1710年に当支教区は国王パトロンの教区となる。続く1713年の村長命令は当教区でのルター派の存在を容認したが、しかし礼拝・祝祭・洗礼式・聖餐式では改革派教会規則の遵守を再度強制した。我々がここで留意したいのは、この強制策がとられた同じ年に当村の世襲小作を定期小作へ変更し、東部御料地のように小作に対する直接的支配・管理を強化する政策が実施に移されようとしたことである。その結果国王と小作との対立関係が長期間続き1766年に小作側の勝利の内に新契約が結ばれ従来の小作料の永代化が実現されたのである²³⁾。

以上のように、第一に教区はルター派の存在を容認する寛容を示したが、しかし宗教的儀礼についてはそれを許容しなかった。ここでは、上述した農民間の自立した関係と礼拝・祝祭・洗礼式・聖餐式といった教会儀礼に対しては異端を排除することとが共存していたのである。だが18世紀90年代に入ると教区民が教会ヒエラルヒーに特別な権威を認めたという事例は後にみる日誌からではうかがわれない。例えば生は、家での幼児洗礼式で、後述されるように、親族のみならず教区内外の友人によって盛大に祝賀され、一方死はたとえ親族外のものであれ暗黒な恐ろしい世界のごとく象徴化されていた。特にこの死の観念についてみるとこれは、後述されるように、教区民の自然及び宗教との関係にも反映され、死の宗派的儀礼化の強制にもか拘わらず、まず教区民自身によって信仰の次元へ転換され、そしてその後次第に——葛藤と動揺を経ながら——教会規範を受容するように内面の変革が遂げられていったのである。第二に国王との小作関係については事実上世襲小作の所有権及び人格権上の相対的な自由が獲得されていた。以上のように18世紀末のノイホラント教区民は聖（教会）・俗（国王）の権威に対して自立した関係にあったのであり、これと更に上段で指摘した遠隔地市場（世界）との交渉とが教区民の世界像と日常行為に作用した外的な条件となっていたのである。

III. ノイホラント学区の識字力

〔1〕 1780年代のノイホラント村と隣接する領主所領区域内の隸民の識字力をみると、当村民29名が遺言状を書いていたが、隣接する領主所領区域村落の農民は依然として署名がわりに3個の十字を記す状況であった²⁴⁾。学区間の比較も上げておこう。学区はノイホラント教区とこ

表 1. 5 学区の学校教育概況 (1812/13年)

学 区	校舎 の状況	教師 の資質	通学 状況	生 徒 の 態 度	学 力
ノイホラントラント	良好	良好	定期	礼儀正しい・友好的・ 活動的・注意深い	熟慮型・正確な読み力・ 正確な書字力
クロイツブルッフ	良好	良好	不定期	内気・柔軟性に欠ける	中程度
リーベンベルク	良好	不良	—		[満足できる状況にない]
クレーフィシェ・ホイザー	荒廃	不良	—		
ツエーンデニック	無し	—			

GSaB. Pr. Br. Rep. 2B. Abt. II. 1056. より作成

の支教区がそれぞれ独立した学区となり、全体で査察（視学）監督区となっている。

第 1 表は 1812/13 年の教会—学校査察報告より 5 学区の概況を示したものであるが、これを見てもノイホラント学区の児童の学力が他学区に比べて格段に高水準にあったことがうかがわれよう。我々はすでにこの学力の言語表現力を考察し、それが思考対象の時間的・因果的關係を感情の時間的推移も含めて文法的に妥当な構文で表現することができる水準にあったこと、そしてこの言語行為が主観的印象や日常経験に制約されない認知構造の形成と対をなしていたことを推定した²⁵⁾。この水準の学力が遺言状や日誌の言語行為の基礎的能力となっていたのである。

〔2〕 ノイホラント学区が上記のような高い学力水準を有した理由を確定することは容易ではない。ここでは当学区住民の学習意欲を示す事例について言及しておきたい。

まず第 1 にあげたいのは、新任教師ツァイクに対する現物供与に関して、1835 年にポツダム県庁に提出された文書を見ると、52 世帯中村長以下 34 世帯の出席で契約が交わされたことである²⁶⁾。これと関連して 1840 年に村長シュナイダーとゲマンイデの署名でポツダム県庁に提訴された文書もみておきたい。このなかで注目したい事例は、村長シュナイダーの文章力もさることながら、当学区住民が教師ドムトに対して彼が授業を放置してカードに興じていたため彼に対する給付負担を拒否したこと、その上多数の学区住民がその子どもを学校から引き上げさせて隣接するリーベンヴァルデ村の学校へ通学させたこと、結論としてノイホラント校の学習活動が回復されることを給付の条件としたことの 3 点である²⁷⁾。このように、時代が 19 世紀に入っているが、ノイホラント学区住民は教師に対する給付（現金と現物）の代償としてその行為を監督し場合によっては給付と子どもの就学を拒否する権限を行使してまでも子どもの学習活動を維持することに努めたのである。

いま一つ注目したいのは農民 W. ヤコプのポツダム県庁宛書簡 (1835 年) である。書簡自体は A 4 判で 59 行から構成され、構文上も論旨も明解な文章である。W. ヤコプは村内名望家ではない平均的農民である。彼は 6 人の子どもを持ち、4 人が就学していたが、この内 12 歳の最年長者が長期病弱で学校までの距離 3/4 マイルを通学することが困難になった。この事態を解決するために彼は、「私は子どもの教育を放置する気持はない。したがって家庭教師を雇った。」（書簡の主旨は子ども 4 人に家庭教師を雇ってよいかを照会したもの）のである²⁸⁾。これもまた学区住民の書字能力と学習意欲を例証するものである。

〔3〕以上の二点の他に、後述するカリース家以外に F. W. ハイイツ、C. L. ヴァルターの日誌が残されていることをも考慮に入れると、ノイホラント学区が、口頭伝承文化から書字を媒体にして自己の感情・思考及び多様な日常行為を表現し、逆に文字によって感情・思考・動機を自己制御する或るいは統制させられる文字文化社会へ移行していったことがわかる。

ここでノイホラントのこの文字社会化が極めて特殊な事例であったのかどうかについて簡単に言及しておく必要がある。文字社会化の問題は民衆啓蒙及び民衆読書の二領域で従来言及されてきている。しかし啓蒙主義の社会史研究を意図した研究グループの成果を繙いても、これまで口頭伝承の世界にあった民衆（農民）を、被啓蒙者ではなく自己自身を自ら啓蒙する者として、その文化的営為を描き出そうとする成果は見出し難い²⁹⁾。一方民衆読書に関する最近の研究は上記の事例を評価する際のいくつかの視点を提供している。なかでも民衆読書研究の画期をなすシェンダの成果によると、18世紀末のいわゆる後期啓蒙主義の時期に「新たな現象」として民衆に「読み力」「読書欲」が「行商文学 Kolportageliteratur」と称される夢判断・魔術・隠語・ほら・恋文を満載した大衆娯楽本の普及とともに出現し、この読書が例えば農家の冬季間の夜の読書会で朗読されていた³⁰⁾。また R. ズイーゲルトの精緻な研究では、シェンダよりも民衆の読み力の拡がりを強調しているが、その論拠となった事例は1770年代以降大衆娯楽本出版の「異常な上昇」であった。彼は更に読書の形態について貴重な文献を蒐集している。それらによると、夜の読書会は就学している子どもが「最高の読む人」となっていたのである³¹⁾。

ところが両者ともに農村における読書の普及が実際どの程度であったのかについて示す具体的な教区一学区の事例研究を欠いている。同時に我々が手にすることのできる農民日誌で、信心書・聖書・農業カレンダーの所有は一部確認されているが、これらの読書行為について記したものは見いだしえなかった。従ってノイホラントの上掲の事例がどの程度他でもみられたかについて言及することは研究史の現状からみて断念しなければならない。だが、それにもかかわらず、ノイホラントの事例が両者の上段の指摘より当時の「新しい現象」の一つに数えられるべきものであったと考えても早急に失することはないであろう。

IV. カリース家日誌で記録された農民の世界像と日常行為

〔1〕カリース家の初代ヨハン・クリスチャン・カリースは1719年にクリスチャン・ハイイツ家の保有地を譲渡されて世襲小作となり教会理事職を勤めている。日誌の執筆者であるクリスチャンⅡ世は1772年にフリーデントール管区長より世襲小作の地位を承認され、35歳で当家を相続する（1815年没）。1782年には村落裁判所判事補に就任した。

クリスチャンⅡ世は世襲村長職にあるシュナイダー家の長女クリスチャン・ルイーゼ・シュナイダーと、その弟ゲオルクはルイーゼの母、すなち1731年に他界した村長ミカエル・シュナイダー未亡人と、またカリース家の分家であるハインリッヒ・カリースはルイーゼの妹とそれぞれ結婚している。さらにクリスチャンⅢ世は判事補マルティン・ハインリッヒの娘ドロテア・エリザベートと、クリスチャンの弟フリードリッヒは教会理事職を代々勤めるハイイツ家のサムエル・ルドヴィヒ・ハイイツ未亡人と、クリスチャンの妹クリスチャン・ルイーゼは判事補マルティン・ハインリッヒの長男クリスチャンとそれぞれ結婚している。カリース家は以上のように村内の代表的な名望家と婚姻関係を拡げて、1835年段階で村内第3位の家格にまで上昇

している³²⁾。

〔2〕 カリース家の日誌は1772年から1810年までクリスチャンII世、それ以降1826年までクリスチャンIII世によって記録されている。文体はドイツ文字の筆記体で書かれている。日誌は豚皮の装幀(222×170mm)で、頁数は77ブラット(77×2頁)ある。J. ペーターズがこれを原文に忠実にラテン文字に直しており、ここではそれを使用する³³⁾。

ノイホラントではカリース家の他に、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ハインツ(上掲ハインツ家の次男)とカール・ルードヴィヒ・ヴァルターの日誌が発見されている。前者は1843—1857年の15年間にわたって記憶に残る事柄——家畜・飼料・穀物の売買、家族の誕生・死亡——が7枚のフォリオ(34×21cm)に記述されている。その構文は、「私の妻アウグスト・フリードリケ・ベスドルフェが死亡した、1856年の10月29日朝3時」「愛するお父さんと親戚の皆様、私はあなたがたに報告しなければなりません、私たちは行くことができません、その理由は私が少し前から病気になったからです」³⁴⁾にみられるように、非常に簡潔である。一方後者は厚紙(背と角は皮)装幀(33×20cm)の出納簿で、1859年のみが記されている³⁵⁾。

〔3〕 日誌は通常生業簿記といわれる歳時記に大別される(但し、カリース家日誌は両者を兼ねている)。上記のように装幀されている場合の他は、聖書の余白にメモ書されたり農業カレンダーの日付欄に記入されており、そのことがまた日誌の発見を困難にしているようである³⁶⁾。現在の日誌の発掘状況は非常に限られており、この分野の研究は立ち遅れている。

本研究で補助的に使用される日誌2篇についてここで紹介しておきたい。1篇は旧マルブルク郡クールマイツ村長・農民ペーター・ユングストの日誌(1782—1848年)である³⁷⁾。もう1篇はヘッセン・ダルムシュタットのアルスパッハ村農民ヨハン・フリードリヒ・アールハイム(1717—1773年)日誌である。これは、豚皮装幀(21.5×16cm)、140頁の大部の日誌で、16歳から21歳にかけて執筆されている。その内容は第2表に示すようにカリース家日誌より多岐にわたっており、彼の書字力は当村の村落学校で習得されたものである³⁸⁾。

〔4〕 次にカリース家日誌に記載された記録よりクリスチャンII, III世の自然観, 死生観, 宗教観を解釈し更に村外の世界との関係の広がりをもみることによって、世界像と日常行為を描き出してみたい。その際に必要に応じて上掲の日誌も参照したい。まず自然観である。

カリース家日誌の特徴は民間療法が多数蒐集されていることである。この中には魔除けに関する記述が少なくない。その2例をあげておこう。「聖金曜日の日の出前に或るいは5月1日にナナカマドの枝数本をその葉と一緒に取って、これを家畜小屋の戸口の上に差す、これは悪魔にたいしてとてもよくきく」(C. 91), 「家長か主婦が農場を清めておこうとすれば、オオバノコギリ草根の丸薬が役にたつ、これを聖ペーターの日(2月22日)に家の戸口と家畜小屋の戸口の下に埋めれば、魔法使いは農場

表2. 記載事項割合

項 目	記載合計	%
国際事件	17	12
国内事件	4	3
市場情報	1	
村境紛争	1	
村内事件	8	6
火災		
喧嘩		
殺人		
野獣		
農 業	64	46
家畜		
収穫		
価格		
気 象	29	18
若 者 組	3	2
教 会	6	4
祭 日	2	1
学 校	2	1
ユダヤ人	1	
ジプシー	1	
人口動態	15	11

A. 10—70 より作成

に魔法をかけることができない。」(C. 99)

このように家畜に対する悪魔祓に注意が払われているのは、酪農経営に起因する。これに関連するものとして他に「馬の足が腫れた場合」「馬が食べ過ぎた場合」「雄牛を4週間で太らす」方法、「雌馬と雄馬が交尾しない場合」「雌牛が妊娠しない場合」「雌牛のシラミ対策」「雌牛の歯がグラグラした場合」「馬の食欲がない場合」等々の、家畜の民間療法が多数記述されている。クリスチャンII世はこの療法の効果もそれぞれ確認している。この療法で対処できない場合には、例えば牛馬の頭部の潰瘍治療に20km離れたグランゼーの獣医まで、1775年3月1日から5月17日にかけて計3回通院している(C. 93)。さらに牛の品種改良の知識を得るために当時の家畜市場として有名なデッサウ(片道175km)まで視察に出かけている(C. 98)。以上のように、クリスチャンII, III世は特に家畜の病気と飼育法改善に伝来の方法とその効果を多数記述している。しかしその一方で両者は獣医にさえ対処できない病気には悪魔祓に頼らざるをえなかった。また実際にそのケースの記述は少なくなかった。

この他にアールハイムとユングストの日誌も参照しておきたい。アールハイム日誌ではアルスバッハ村が葡萄の商品栽培地であるために天候に関する事柄の記載数は第2表にみられるように単独では最も多い。特に異常気象に関する記述は詳細である。その2例をあげてみたい。「この年(1739年)天上に三夜いつものように不思議な兆候が認められた、その結果天上は一面真赤になったり半分が時々真赤なスジでひかれたようになり、短時間で消え、しかしすぐにまた現れ、天上のあちらこちらを消えたり出たりした。(……)人々は、それは寒気の兆候だと想像した。何人かは、主である神が我々に何か大変なことを定められた、と考えた。(……)しかし寒気の憶測はすぐ真実になった、その結果4月に入っても寒気と雪がなくならなかった。」

(A. 15)「(1741年)3月17日夕方、昼と夜が変わるとき、天が明るくなり、天の朝(東)から白いすじが出、これは2つに分かれ、1つは日中(南)、1つは夕方(西)へ進んだ。このすじは白色以外に変わらなかったが、長い光で、末端は尖って、非常に早く3/4時間で全天体を動いた、朝から夕方まで。日中へ進んだすじは太陽が通過してのち3時に通り過ぎ、もう一つのすじは夕方へ向かって地平線近くへ進んだ。」(A. 35)アールハイム日誌にはこのように詳しく観察された彗星の記述が他にも多数みられる。その特徴は、彗星につきまといっている村人の伝統的な不吉—異常気象の観念と、更に彗星自体を正確に観察した結果とが併記されていることである。アールハイム自身は、「人々は、寒気の特徴だと想像した」と記していることから理解されるように、彗星が不吉な兆候という観念に囚われていたのではなく、この現象が超自然的な奇跡ではない天の自然現象の一つとして「どのようにかつどこで発生するかについて」探ろうとしており、星より強い光を放つという観察結果より、「星より高い天上」で発生したと推理している(A. 39)。アールハイムのこの自然現象に対する態度は、葡萄の収穫前の天候を記録して、これ(=日誌)を予報記録として利用しようとする意図(A. 17-18)と無関係ではない。

次にユングストの日誌から同様の彗星の例をあげておこう。それは1815年5月17日付けの記録である(一部省略)。「1811年5月に天でものすごい大きな尾のついた大きな彗星が現れた。それはフランスから夕方頃に出てロシアの方へ向かった。しかし9月に星は向きを変えてフランスへ向かった。(……)人々はこの彗星が神の徴候であったということを見ることができた。1812年5月にナポレオン皇帝は(……)ロシアに行軍した。総勢605000人でロシアへ進軍し、そしてこの年の彗星が(彼らに)指示した進軍を受け入れた。(……)いま(1812年9月)フランス軍はモスクーまで進んだ。(……)それから神の賜物によってモスクーは夜に街中が燃え、

フランス軍は退却しなければならなくなった。いま神の賜物は向きを変えた。(以下略)」(J. 196-197) ここでは彗星が神の「賜物」で、ナポレオン軍進攻の事実は正確に記述されながら、その敗北—撤退のみが神の意思と捉えられている。

以上の記述例より、自然観についてまず注目すべき点は、家畜の民間療法の効果および異常気象の過去のデータが丹念に記録され、これが予測される異常事態の処方とされたことであり、ここには、更に民間療法で不可能な場合に獣医に治療を求めたり彗星の現象を正確に観察しその正体を探ろうとする記述でもみられたように、自然現象を不可知な神の意思と捉えそれに従うのみの態度はみられない。だが自己の能力を超える事態に直面すると悪魔祓や神の「賜物」という伝統的な自然観に回帰する傾向が依然として見られる。

[5] 次に死・生と信仰について取りあげる。1—2行という短文からなるハインツ日誌の中で、比較的長文のフォリオがある。そこに「私たちの四人の亡くなった子供の生涯」が記されている。「アウグスト・フリーデリッケは1842年9月27日に誕生し、1848年8月19日夜11時に死亡した。彼女は5歳10ヶ月12日であった。フリードリヒ・ヴィルヘルム・ハインツは1844年9月30日朝2時に誕生し、1848年9月4日夜に死亡した、年齢は3歳11ヶ月4日であった。カール・ルードヴィヒ・ハインツは1847年10月13日朝2時30分に誕生し、10月17日夜5時に洗礼され、1848年8月27日夜5時に死亡し、8月30日に埋葬された。彼の年齢は10歳10ヶ月11日であった。ヴィルヘルム・クリスチャン・ハインツは1847年10月13日朝2時45分に誕生し、10月17日夕方5時に洗礼され、1857年8月23日朝8時に死亡し、8月25日に埋葬された。彼の年齢は10ヶ月7日であった。」(H. 59-160) この記述には我が子の死に対する悲しみが一切表現されておらず、誕生—死—埋葬の日時と年齢のみが、分と日までを記憶に留めておこうとするかの如くに、記載されている。感情を書字で表現する適切な語彙を見出しえなかったのか、あるいはその感情を表に出すことを抑制していたのかここでは判断できない。だが、敢えて主観的な印象を述べれば、この二つの理由のいずれであっても、逆にこの表現そのものがかえってハインツの悲しみの深さを訴えているように思われるのである。

カリス家日誌でも死—誕生の記載が非常に多い。その対象は親族外に及んでいる。特に1816—1817年に身内の幼児の不幸が連続しておこっている。その表現はハインツとほぼ同じである。ところがこの記述のすぐ後に、「1817年9月15日、私は天使像をリーベンヴァルデの親方ヒュルステンベルガーに装飾してもらった。」(C. 123) とある。更に留意したい点は——これは他の日誌には見られない——洗礼祝賀の具体的な記述である。続けて2例あげる。「1775年9月24日、ヨハン・クリスチャン・(クリスチャンIII世) 誕生。9月29日洗礼。洗礼立会人、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ガンツ (以下11名記載：略) ヨハン・クリスチャン・カリスは1776年4月22日、1歳30週で離乳。」「子どもの洗礼のための出費、1トンのビール、2ターラー8グロシェン。12ヴァルト (×1.14リットル) のブランデー、1ターラー21グロシェン。酢、4グロシェン6ペニヒ(……) 総計25ターラー11グロシェン6ペニヒ。」(C. 123) またクリスチャンII世の第2子の洗礼を記した頁には、「1783年8月17日、神の御子、イエス・キリストの血が汝を聖洗水の沐浴によって汝の罪から洗い浄める」(C. 116) と記述されている。

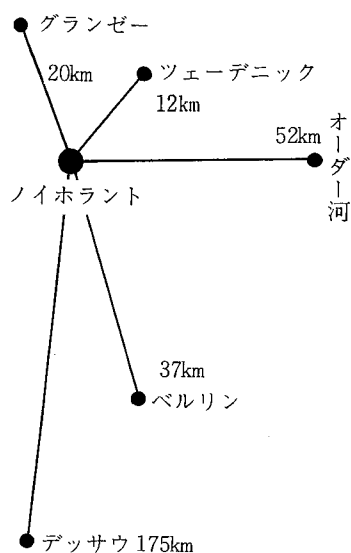
カリス家日誌でも死の記述には感情が表現されていない。だがそこには幼児の誕生—洗礼—死亡—天使というイメージが定式化されているように理解される。換言すれば、生命誕生—洗礼、死—天使というように生—死のイメージと宗教的な意味付けとが対になって死生観が作り上げられているように思える。だがこのイメージの書字による定式化が、特に頻発する死の状

況を記述する時にはいつも表現されているかという点、必ずしもそうではない。多種多様な民間療法で治癒不可能な病は、家畜の場合のように、「悪魔によって魔法をかけられた」状態とみなされ、死は魔術的な、暗黒な恐ろしい世界のごとく象徴化されていた。「この(オオバノコギリ)草根を身につけるならば、悪魔に魂を奪われることはありえない、或るいは魔法をかけられることもない。」(C. 99)「子どもの洗礼(……)」で、この2つ(オオバノコギリとニンニク)の草根をテーブル掛けの下に置くか、あるいはタバコのパイプに詰めておくと、悪魔が傍にいても椅子に座ることも部屋にいることもできない。」(C. 100)といった悪魔祓の日常的行為から、逆に、暗黒の神々に対する畏怖の心情が読みとれるであろう。その畏怖の心情はしだいに唯一の神とイエスを信じ、それを確信するように変化していく。しかしその確信は、「カーデル・ルーデヴィヒは1784年9月17日に誕生しそして1790年6月8日に死亡した。彼の年齢は5歳37週5日。」(C. 124)と記述された直後に揺らぎを見せ、次のようなクリスチャンII世の感情の動揺―内面の葛藤が描かれる。「イエスは私の確信であり、私の救済者は不滅である、私はこのことを知っている、そうでなければ私はこれを知らない、それはそれで私はよしとするが、だが長い死の闇が私を不安にする。」(C. 1124)

こうした内面世界の動揺―葛藤の後に、慎み深く己を抑制し、敬虔に礼拝へ自己を組み入れていく信仰の世界が形成されていった。しかしこの信仰の世界はクリスチャンIII世になってようやく確信をもって記述されるようになったのである。「1813年3月18日、私たちのところで感謝祭が開催された。日中おこなった。イザヤ書第54章7、8節(?)、“神は私たちすべてを祝福され、私たちのもとにおわす”」(C. 122)「1806年10月14日、イエナで戦闘に入った。10月26日フランス軍が当地に入る。1813年10月17―18日フランス軍ライプチヒで敗北。感謝祭が当地で開催された。1814年3月30日プロイセン軍入城。5月1日再び祝祭が催された。“賛えられ、最高の神を敬い、賛美されよ、いま神を感謝せよ”(……)」(1814年5月1日)(C. 122)この2

例は解放戦争前後の教会における戦勝祈願と勝利のミサであり³⁹⁾、これを直ちにクリスチャンIII世の宗教的態度と同一視することはできないが、しかし「最高の神」に祈り「祝福」を得ようとする宗教的動機と行為を選択する意志を読み取ることも可能であろう(あるいはまた教会がクリスチャンIII世の信仰をとらえたとも理解することができるかもしれない)。

[6] 農民と農民及び国王更に教会との関係は、II章で言及したように、経済的・人格的に自立していた。この自立した関係が村外の世界に対しても認められるかどうかをここでみておこう。そのためにクリスチャンII, IIIの村外世界との交渉をここでは彼らの情報収集・行動に示される地理的範囲から推定してみたい。左図はそれをノイホラントから直線距離で表してみた。いくつか例をあげてみよう。



1773年8月(C. 93)と1811年7月(C. 124)にクリスチャンはオーダー河へ旅行している。両旅行とも干し草の買入れを目的としたものである。更にべ

ルリンへは穀類（カラス麦，ライ麦，大麦）及び干し草・ワラを「売却」する（C. 125）他に「フランツェーギシュ・ブフホルツ（現ベルリンーパンコー）へ栗毛の雌馬を配送」（C. 101）しており，ベルリンーオーダー河からノイホラントの地帯はクリスチャン家の経済圏であった。クリスチャン II 世が約175km 遠方のデッサウ家畜市場へ往路 6 泊 7 日で出かけた記述は彼の行動範囲の広がりを物語る。ここの記述では途中の通過・宿泊地名，宿泊代金のメモの他に復路最初の宿泊地のヴェルリッツで 3 倍の金を払って「劣悪な部屋で楽しむ」も特に書き添えられており（C. 98），書字行為が過去の印象・体験を整理し追憶する手段となっていたことについてもついでに指摘しておきたい。ところで市場での具体的な体験はカリース家日誌では上記の取引の品目と価格以外記されていない。そこでアールハイム日誌から次の記録を付しておこう。「（1743年）4 月17日，都市ツヴィンゲンベルクは家畜と雑貨市を開いた。これは今年第 1 回で，4 月17日家畜市，18日に雑貨市が開かれた。都市ツヴィンゲンベルクは銀製の新品の櫛を作らせ，市で最初に馬を売った者が櫛を永遠の記念にもらう。（……）雑貨市はかなり楽しそうだった，特に農夫にとって，なぜならば楽士と無料で踊ることが許されたからである」（A. 50-51）。

次に情報収集の地理的範囲をみておきたい。まず一例をあげてみる。「ツェーデニックの門番リーゼはテンプリン門で妻を殺害しツェーデニックに拘置され，プレントラウの死刑執行人によって処刑された。ツェーデニックの町前の処刑場でリーゼは頭を撲殺された。それは隅に置かれ，そこに埋葬された。」（1783年 5 月16日）（C. 102-103）これについてすこしコメントを付しておく必要があるだろう。既に述べたがクリスチャン II，III 世はノイホラント村裁判所判事補を勤める。判事補は村長シュナイダー（家）とともに村理事会を構成し，同時に下級警察・行政——租税査定（C. 91）・国王当村通過時の村民動員（C. 95）・宿営配備・軍用馬供出（C. 116, 120, 121）・人頭税納入（C. 118）・脱走兵の処罰（C. 128）——を担当する。これをみるとクリスチャン II，III 世の公職に誠実な下級行政官のイメージが彷彿とさせられると同時にノイホラント教区が行政単位としての機能へ転換している様子もうかがえるが，しかしこれは今後実証していかなければならない重要な課題である。それはともあれクリスチャン II，III 世のこうした立場が情報収集の対象を選択させているように理解されるのである。他の例もあげておこう。

「1786年国王フリッツ（フリードリッヒ II 世）死す，9 月17日。年齢74歳29週 1 日。」（C. 97）

「1787 年 8 月 1 日軽騎兵隊がベルリンからオランダのクリヒへ進んだ。そして1788年 1 月21日再びベルリンに戻る，クリヒに24週 5 日いた。」（C. 97）更に〔5〕で紹介したイエナ及びライプチヒの戦いの記録も付け加えておきたい。

これらの記述例は，数としては取引関係にくらべて格段に少ないが，村外に発生した世界的事件—国際事件に及んでおり，クリスチャン II，III 世の情報を媒体とする社会的関係の広がりが看取されるであろう。同じことはユングストの上掲したナポレオンのモスコー侵攻から敗退に至る記述でも知られる。またアールハイム日誌では，神聖ローマ帝国・フランス・イギリスの国際関係が克明に記述されており（A. 10, 33, 50, 52-55），ここでも情報を媒体としたアールハイムの世界の広がりが感得されるのである。

V. 総括

〔1〕 18 世紀末のノイホラント教区をまず第 1 に現実の社会関係，第 2 に教区民の世界像と

日常行為から構成してみると、そこに我々はこれまでの教区像とは異なる像を描きだすことができる。教区民は教会ヒエラルヒーに特別の権威を認めず、更に国王とは、土地の世襲所有権を獲得することによって、経済的・人格的に自由であった。実は、他ならぬ、教区民に、これらの社会関係に対応する、特に自己の行為決定の際の自己と他者・権威との関係認識、換言すると世界像が書字行為によって定式化され表現される時に、自己の意志によって行為を決定しようとする新たな行動規範を持つ教区民が既存の教区から現れることとなったのである。この教区民は同時に自然・死生に関しても新たな関係を作り上げることを試み、更に教区をこえて50km内の地理的範囲にまでに日常行為を上げたのである。このように周囲が教化・統合政策の単位であったルター派教区の中から18世紀末これとは全く異なる教区がノイホラントに現れたのである。

[2] だがこうした結果に対して、このノイホラント教区の事例が特殊なもので、従って一つの歴史的傾向を意味するものではないという批判が直ちに予想されうる。勿論本稿は一事例研究であり、この研究の結果を一般化することはできない。このような教区・学区の事例研究が今後も積み重ねられていくことが必要である。また本研究で試みられた、農民自身が語った・書いた史料で世界像と行為を解釈する研究方法自体も、歴史研究の場で検証されねばならないであろう。

注

- 1) 増井三夫「18世紀プロイセンにおける教育構造の分析——特に東プロイセン私領地区域の教育史的研究——」I—III, 上越教育大学研究紀要第6—8巻, 1987-1989年参照。
- 2) 増井「18世紀プロイセン教区の統合化機能——村落学校の規律化機能——」上越教育大学研究紀要第10巻, 1991年参照。
- 3) Hans-Ulrich Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte 1815-1845/49. München, 1987, S. 478. 及び大野英二・肥前螢一訳『ドイツ帝国 1871—1918年』未来社, 1990年, 160-162頁, 184-198頁参照。
- 4) 増井「18世紀プロイセン教区の統合化機能——村落学校の規律化機能——」19-20頁参照。
- 5) Jürgen Kocka, Weder Stand noch Klasse. Unterschichten um 1800. Bonn, 1990, S. 206f.
- 6) R. Schenda, Volk ohne Buch. Studien zur Sozialgeschichte der populären Lesestoffe 1770-1910. Frankfurt am Main, 1988, S. 49f.
- 7) 原聖『周縁的文化の変貌——プルトン語の存続とフランス近代——』三元社, 1990年, 109頁参照。
- 8) ラスレット『われら失いし世界——近代イギリス社会史——』(川北稔・指昭博・山本正訳) 三嶺書房, 1986年, 307頁。
- 9) ロベール・マンドルー『民衆本の世界——17・18世紀フランスの民衆文化——』(二宮宏之・長谷川輝夫訳) 人文書院, 1988年。長谷川輝夫「民衆本の世界」(同書所収)。同「18世紀フランスにおける『民衆』の読書」『人文自然科学論集』東京経済大学, 第77巻, 1987年。同「書物の社会史と読書行為」『思想』岩波書店, No. 812. 1992年。
- 10) ロジェ・シャルチュエ「近世フランスにおける書物市場と読書行為——フランス革命の文化的起源によせて——」『思想』岩波書店, No. 812. 1992年, 30-31, 41頁。

- 11) カルロ・ギンスブルグ『チーズとうじ虫——16世紀の一粉挽屋の世界像——』（杉山光信訳）みすず書房，1991年，5頁。
- 12) 同上書，134，137，237頁。
- 13) 同上書，特に38，60，65頁参照。
- 14) 喜安朗『マルタン・ナドの世界——近代における個の自立と共同性——』二宮宏之編『深層のヨーロッパ』山川出版，1990年，249，279頁。
- 15) 茂呂雄二『なぜ人は書くのか』認知科学選書16，東京大学出版会，1988年，特に66-69，72-77頁，及びブリギッテ・シュリーベン＝ランゲ『社会言語学の方法』（原聖・糟谷敬介・季守訳），三元社，1990年，特に第6章参照。
- 16) 本論は，増井「Neuholland村における公教育の効果——農民日誌の分析——」松島釣代表『市民革命と近代公教育の成立に関する基礎的研究』平成元・2年科学研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書，1991年を，分析視点と史料を補足して，発展させたものである。
- 17) Ortschafts=Verzeichniß des Regierungs=Bezirks Potsdam nach der neuesten Kreiseintheilung vom Jahre 1817, mit Bemerkung des Kreises, zu welchem der Ort früher gehörte, der Qualität, Seelenzahl, Confession, kirchlichen Verhältnisse, Besitzer und Adreß=Oerter, nebst alphabethischem Register. Berlin, 1817.
- 18) 増井「Neuholland村における公教育の効果——農民日誌の分析——」93-94頁。
- 19) Brandenburgisches Landeshauptarchiv Potsdam (以下, BLaP.), Pr. Br. Rep. 2A. Rep. Pdm. II. N Nr. 1513.
- 20) BLaP. Pr. Br. Rep. Pdm. II. N Nr. 1513.
- 21) 増井「Neuholland村における公教育の効果——農民日誌の分析——」106-107頁を参照。
- 22) Geheimes Staatsarchiv Berlin (以下, GSaB.), Pr. Br. Rep. 2B. Abt. II. 1056.
- 23) 増井「Neuholland村における公教育の効果——農民日誌の分析——」106-107頁。
- 24) 同上，108頁。
- 25) 増井「18世紀プロイセン農村学校における基礎学力」教育史学会第35回研究大会発表要綱集録（1991年）58-59頁を参照。
- 26) Actum Neuholland den 15^{ten} August 1835. In: BLaP. Pr. Br. Rep. 2A. Rep. Pdm, II. N Nr. 1513.
- 27) Erneuerte Beschwerden der Gemeinde Neu=Holland (31. 1. 1840). In: BLaP. Pr. Br. Rep. 2A. Rep. Pdm. II. N Nr. 1513.
- 28) An ein Königliche Hochlöblichen Regierung zu Potadam. Der Königliche Erzsitzer Wilhelm Jacob thut die alleruntertänigste Anfrage: ob ihm erlaubt sey, für die Erziehung seiner Kinder sich einen Hauslehrer halten zu dürfen, und bittet um die Bewilligung (29. 12. 1835). In: BLaP. Pr. Br. Rep. 2A. Rep. Pdm. II. N Nr. 1513.
- 29) 例えば, Hans Erich Bödeker, Ulrich Herrmann (Hrsg.), Über den Prozeß der Aufklärung in Deutschland im 18. Jahrhundert. Göttingen, 1987. 及び Rudolf Vierhaus, Aufklärung als Lernprozeß, in: Ders., Deuschchland im 18. Jahrhundert. Göttingen, 1987, S. 84-85を参照。
- 30) R. Schenda, op. cit., S. 42, 86, 95, 232-253, 446f.
- 31) R. Siegert, Aufklärung und Volkslektüre Exemplarisch dargestellt an Rudolph Zachrias Becker und seinem "Noth-und Hülfsbüchlein", in: Archiv für Geschichte des Buchwesens, 19. Frankfurt a. M, 1978, S. 579, 598, 963f, 968f, 974f. なおズィーゲルトは娯楽本の農村への

- 普及に行商人ではなく行商人と書籍商人の中間的性格をもったブッフビンダー（製本屋）が役割をになったとみている（Ibid., S. 968f.）。現実には、クールマルクの職業統計（1750/1801年）をみると製本屋親方98/116人（書籍商人親方36/33人）の存在が確認される（F. W. A. Bratring, Statistisch-Topographische Beschreibung der Gesamten Mark Brandenburg. [1804, 1805, 1809] Berlin, 1968, S. 65.）。
- 32) 増井「Neuholland村における公教育の効果——農民日誌の分析——」94-95頁。及び BLaP. Pr. Br. Rep. 2A. Rep. Pdm. II. N Nr. 1513.
- 33) Jan Peters, Hartmut Harnisch, Lieselott Enders, Märkische Bauerntagebücher des 18. und 19. Jahrhunderts. Selbstzeugnisse von Milchviehbauern aus Neuholland. Weimar, 1989, S. 88-128（以下本文中の引用に当ってはC.に引用頁数を付す）。
- 34) Ibid., S. 157-165（以下本文中の引用に当ってはH.に引用頁数を付す）。
- 35) Ibid., S. 183-209.
- 36) H. Ottenjann, G. Wiegmann (Hrsg.), Alte Tagebücher und Anschreibebücher. Münster 1982, S. 64-77. 参照。
- 37) Alfred Höck, Aus dem handschriftlichen Hausbuch eines hessischen Bauern, in: Zeitschrift des Vereins für Hessische Geschichte und Landeskunde. Band 73. Kassel u. Basel, 1962（以下本文中の引用に当ってはJ.に引用頁数を付す）。
- 38) Die Bergsträßer Hauschronik des Johann Friedrich Ahlheim aus Alsbach 1733-1755, bearbeitet und herausgegeben von Rudolf Kunz, in: Geschichtsblätter Kreis Bergstrasse. Band 8, Heppenheim/ Bergstraße, 1975（以下本文中の引用に当ってはA.に引用頁数を付す）。
- 39) 例えば, G. Kunze, Kirchengeschichte. Die religiöse und nationale Volksstimmung in Preußen während der Freiheitskriege 1813-1815. Oppeln, 1949.がプレスラウの事例を詳しく紹介している。

Die Welt der Parochie Neuholland im letzten Drittel des 18. Jahrhunderts

— Weltbild und tägliche Handlung der Bauern
in Bauerntagebücher —

Mitsuo MASUI*

RESÜMEE

Der Parochie hat bisher als die fundamentale Einheit der ideologischen Indoktrination und Integration betrachtet worden. Ganz im Gegenteil betont W. Neugebauer die begrenzten Effekte absolutistischer Kirchen- und Schulpolitik und die relativ eigentliche Existenz der Bauernkultur gegenüber feudalen Einflüssen. Aber muß dies Untersuchungsfeld in den vielen Einzelfällen genauer geprüft werden.

Diese Forschung hat es vor, im Einzelfall von der Parochie Neuholland von den täglichen Handlungen der Bauern aus die Realität absolutistischer Kirchen- und Schulpolitik zu prüfen. Die täglichen Handlungen der Bauern wurden hier durch die Sprachhandlungen und das daraus interpretierten Weltbild der betroffenen Bauern in Tagebücher analysiert. Dadurch konnten wir den Erfolg erhalten, daß in der Parochie Neuholland im letzten Drittel des 18. Jahrhunderts es keine Funktion der ideologischen Indoktrination und Integration absolutistischer Herrschaft gab, sondern die Ausbildung personaler Identität durch die Schreibfähigkeit und erweiterten Verhältnisse zu den Gesellschaften und Informationen außer der Parochie erschien.

[Inhaltsverzeichnis]

- I. Einleitung
- II. Sozialverhältnisse in der Parochie Neuholland
- III. Schreibfähigkeit in der Parochie Neuholland
- IV. Weltbild und tägliche Handlung der Bauern in der Parochie Neuholland
- V. Zusammenfassung

* Division of Foundations